

和紙を中心とする造形活動の意味と展望

— 造形教室の実践から —

Meanings of using Japanese washi at artistic workshops

— From workshops on practical —

キーワード：和紙、造形教室、木版画、ワークショップ、総合的学習、地域、伝承

渡邊 洋

1. はじめに

日本の各地域には、古くからその製法が伝承される和紙の産地があり、現在でもその姿が残されている。和紙製造は、戦後に一旦衰退した後、工芸的な側面が見直され地場産業として復興されてきている。

しかしながら、和紙に対する捉え方には、「工芸的な製品」、「高価な紙」、「入手しにくい」など、生活から遠い位置にあるイメージが強い。そもそも、日常生活の中にある紙素材は、パルプやコットンを主原料とする洋紙のものが主流である。それに対し、伝統的な製法でつくられる和紙は、地場で栽培するコウゾ(楮)、ミツマタ(三椏)、産地で自生するガンピ(雁皮)を原料としており、その用途は専門的な領域に限られる。

大量生産と大量消費が拡張する社会情勢の中では、和紙を製造する産業が芸術や工芸、建築などの分野で限定的に継承されるその現状を、十分に理解することができる。地域の風土と密接に関わる製造工程や、歴史文化の中に見られる人間の暮らしや市場形態の変遷など地域が伝承すべき内容を含んでいる。歴史や文化という観点から和紙をとらえた時に、その教育的価値を見いだすことができる。このように和紙は、造形活動を基点にした総合的な体験学習を可能とする素材であると考えることが出来る。

上記の内容を背景としながら、高知県吾川郡いの町で行った催事(土佐和紙アートプロジェクト)と、横浜美術館の事業で実践した造形教室(ドローイング

と木版画)について、その記録と調査結果を整理し、教材としての和紙の可能性と市民のための造形活動を考察する。

II. 事例報告

「土佐和紙アートプロジェクト」における3つのワークショップと版画交流展(①木版画制作ワークショップ、②紙漉きワークショップ、③親子で参加するワークショップ『走って跳んで絵を描こう』、④土佐和紙を使った東西版画交流展)、および「ドローイングと木版画」について、その事業企画の背景、概要や実施内容、そして実施結果を以下に示す。

1. 土佐和紙アートプロジェクト

1) 事業企画の背景

平成16年に、オランダのユトレヒトにあるGAU版画工房(グラフィック・アトリエ・ユトレヒト)において、日本の現代木版画技法を紹介するワークショップが開催(作品展示含む)され、当時研修のため当地に留学中の近藤英樹(作家・教員・横浜美術館インストラクター)の導きにより、筆者が講師を担当した。その翌年となる平成17年に高知県手すき和紙協同組合とオランダ大使館、同領事館の協力により、交流事業として企画されたのが、土佐和紙アートプロジェクトである。

この事業は、いの町紙の博物館及び土佐和紙工芸村を舞台とし、外国人作家を招聘した短期滞在型

の研修活動を提供するものであった。滞在した日本とオランダの作家による作品展示と、3種類のワークショップが行われ、和紙製造業の盛んな高知県吾川郡いの町仁淀川流域が伝承する歴史文化とその風土に触れながら、東西文化の交流が実現された。

なお、事業の企画運営及び地域とのコーディネートは、実行委員会代表の近藤英樹が担当している。筆者も、この委員会に所属し、ワークショップの講師を主に担当した。

2) 事業概要

①事業名

「土佐和紙アートプロジェクト“紙のゆく先”～紙にまつわる文化の交流～」企業メセナ協議会認定事業

②事業期間

平成17年8月2日から同年8月14日まで

③実施会場

いの町紙の博物館

高知県吾川郡いの町幸町110-1

土佐和紙工芸村

高知県吾川郡いの町鹿敷1226

④主催

土佐和紙アートプロジェクト実行委員会

⑤共催

いの町紙の博物館、土佐和紙工芸村、GAU

⑥後援

オランダ大使館、オランダ領事館、高知県手すき和紙共同組合、高知新聞社、RKC高知放送

⑦協賛

額師風雅、珊瑚工房一椿堂、日本大昭和板紙西日本(株)高知工場、松山美術学院

⑧協力

(株)四国わがみ、(有)高岡丑製紙研究所、田村寛(紙漉き)、尾崎伸安(紙漉き)、土佐和紙工芸村くらうど、ホルペイン工業株式会社、サクラクレパス

⑨事業目的

全国でも指折りの『和紙』産地であるいの町において、日本、オランダを中心に集まった版画作家がその素材としての紙の魅力に迫るとともに、『和

紙』が造形に与える力について研究する。

ワークショップにおいては『こどもを対象にした絵画制作』『紙漉き研修』『地元紙漉に携わる方を含めた木版画制作』の3つの体験機会を通じて、地元で紙を作る人々、普段から紙を使う作家達、創作に触れるこどもたちそれぞれが一体となり、紙、ものづくりのあり方について考える契機になればと思う。まずはものに触れて考えること、そしてこれらの活動が芸術活動の理解、普及につながってゆくことをこのワークショップの目的としている。

さらに、いの町紙の博物館においては13人の作家がそれぞれ『土佐和紙』にアプローチした作品を展示して、それぞれの表現を見ていただく。紙を通じこれまで触れあう機会の少なかった紙の作り手と使い手が互いのものづくりについて意見を交換し、それぞれに生かし合える新たな道筋が生まれることを願うものである。

3) 実施内容

①木版画制作ワークショップ

場 所 土佐和紙工芸村 創作室

日 程 平成17年8月2日から3日まで

時 間 9時30分から17時まで

内 容 水性板目木版画による1版刷り

講 師 筆者

対 象 オランダ人作家、紙漉職人、市民

定 員 15名(参加者18名)

参加費 ￥1,000-

材 料 版木、彫刻刀、バレン、絵の具、絵皿、刷毛、のり、楮紙は尾崎伸安氏より提供。参加者が用意したもの：普段漉いている紙、試してみたい紙(紙漉をされている方)、下絵(木版画にしてみたいスケッチ)、昼食、エプロン等よごれても良い服、鉛筆、カッター、絵筆、彫刻刀、バレン

画面の大きさ 15×20cm

版木の大きさ 22.5×30cm

版画紙の大きさ 21×26cm

当地で製紙された和紙を使用して、生産者と消費

者の交流を生み出し、お互いの意識をわかり合える体験を提供した。参加した生産者は、使用者の視点から、製品を扱う経験ができた。市民の参加者からは、高知市内での開催を望まれた。滞在の始まったオランダ人作家にとっては、和紙生産地での研修活動にとって、良き導入となったようである。

②紙漉きワークショップ

場 所 土佐和紙工芸村 紙漉き実習室
日 程 平成17年8月4日から6日まで
時 間 9時30分から17時まで
内 容 『楮』を原料とした紙漉き研修
講 師 ロギール・アウテンボーガルト
(手漉き紙作家)
対 象 オランダ、日本の造形作家など
定 員 10名以内(参加者10名)
参加費 ￥6,000-
材 料 楮皮、ネリ(トロアオイ)

和紙の消費者向け(専門性を有する)に、伝統的な和紙製法を再現して、原料の収穫から抄紙までを体験する活動を提供した。学生、美術家などの参加者を得て、和紙素材に対するより深い知識を、経験を通して学べる構成であった。土佐和紙工芸村周辺のロケーションは、体験学習に最適な環境を提供した。現地に勤務する生産者や若い研修生との交流が深まり、参加者にとって学習意識を高める要素となった。

③親子で参加するワークショップ

『走って跳んで絵を描こう』
場 所 土佐和紙工芸村 実習室前広場
日 程 平成17年8月7日
時 間 9時30分から16時30分まで
内 容 大きな土佐和紙に絵を描く
講 師 ドド・ソエセノ(版画家、画家)
対 象 高知県内の小学生
定 員 40名(参加者20名)
参加費 無料
材 料 楮紙は(有)高岡丑製紙研究所の提供、

アクリル絵の具はホルベイン工業株式会社の提供、クレヨンにはサクラクレパスの提供、筆、ブルーシート。参加者が用意したもの:よごれても良い服装、昼食、タオル、着替え。

開催地の近隣に住む小学生の児童を対象に、現地で製紙された襖大の和紙にドローイングを行うという内容であった。展覧会に参加した作家と交流しながら、児童の絵画表現における意識を拡張し、意欲を高めることをねらいとして実施した。当地で産する襖大の和紙を使って、何枚でも自由に絵を描くことが出来る構成とした。

児童画では、身体の動きの自由な展開を妨げない事が重要で、多くの指導書で大きな紙の使用が推奨されている。それを実践し、有効であることを改めて確認した。絵の嫌いな子どももいたが、大人が画面に美しい詩を加筆することで好きになってもらう場面があった。描画(表現)から鑑賞に展開する瞬間を記録することが出来ている。

④土佐和紙を使った東西版画交流展『紙のゆく先』

場 所 いの町紙の博物館 展示室2-2
日 程 平成17年8月2日から14日まで月曜日休館
時 間 9時から17時まで
内 容 土佐和紙を使った版画、作品の展示
入場料 小人(小・中・高)￥100-
大人 ￥520-
出展作家
版画家:ペトラ・フゼス、ヘルマン・ファンデウェールト、シスカ・ポルデフェールト、アンナ・ファンサフテレン、ヨリス・ディクス、木村崇、近藤英樹、十時宏之、村野良子、和田ときわ、および筆者
版画家・画家:ドド・ソエセノ
手漉き紙作家:ロギール・アウテンボーガルト

いの町紙の博物館は、この交流において日本側の基点となった。またグラフィックアトリエユトレヒトはオランダ側の基点である。双方の会場で、両国の作家の作品展示が実現したことには、交流事業として

の意義が感じられた。2つの施設は、自治体からの資金補助を受けて、市民の芸術文化の振興に寄与している。性格の違いこそあれ、こうした場で、市民の研修活動が実現したことは大変喜ばしい。

2. ドローイングと木版画

1) 事業概要

平成21年5月から7月にかけて、横浜美術館の造形教室を担当した。この催しは、市民の創作活動支援事業の一環として計画された「市民のアトリエワークショップ」の1教室である。

財団法人横浜市芸術文化振興財団によって運営している横浜美術館は、市民向け講座として子どもから大人までの様々なワークショップを実施している。学校教育との連携も盛んで、活力のある普及事業が展開している。

講座名 横浜美術館市民のアトリエワークショップ
「ドローイングと木版画」

日程 平成21年5月12日から7月28日まで
毎週火曜日全12回

時間 14時から16時まで

対象 市民向け

定員 15名(参加者11名)

技法 水性板目木版画3版から4版による

材料 画用紙、鉛筆、消しゴム、定規、トレーシングペーパー、彫刻刀、バレン、ヤマトのり、霧吹き、新聞紙、クッキングペーパー、椿油、フェルトまたは手拭い、雑巾、ハコビ、絵皿、水性絵の具。

2) 指導内容

専門的な木版画の技術指導と、ドローイングを啓発しながら、視覚的表現に具体的な展開を与えるためのアイデア作りを趣旨に持つ活動である。同時に、木版画の実習に用いる安価な和紙に対して、専門家が使用する和紙と、アワガミファクトリー製品を提供し、実践的な指導を行う中で、素材の比較検証を体験してもらった。

提供した和紙は、木版画の実習で使用している

K-155、筆者が使用しているRK-29、アワガミから70 g/m²のSH-7、110g/m²のMM-5、39 g/m²のW-8である。

導入時の説明内容(原文)と12回の教室の詳細を以下に示す。

『私の版画制作に関するアイデアを紹介して、オーソドックスな木版画制作をレクチャーします。皆さんには、写真やスケッチで日常を取材していただきます。集めた素材をもとにして、ドローイングしながら絵づくりを行います。木版画の特徴と美しさを伝え、皆さんの感じ取る文化を、版木に刻み込む楽しさを体験します。シナ合板を用いた水性の板目木版画です。特別な技法ではありませんので、手軽に楽しむことができます。』

1回目 版画について説明. 用具の説明.

ドローイングで下図の準備を行う。2回目までに題材をみつけて取材を行う。視覚資料、文献、音楽など題材に関連するものを持参する。木版画作品とその版木を持参し技法用具の解説を行う。

『ドローイングのためのアイデア』資料配布

原寸サイズのイメージ枠が描かれた画用紙を配布。

2回目 ドローイング.

取材した資料の生かし方を考える。水彩絵の具を使って原寸のイメージを描く。同時に小さなサイズで明るさや色味の追求をして求める画面を確かめる。

3回目 彫りと摺りの実演. 版画のための下図制作.

版木を彫りと和紙に摺る。実際に見て学ぶ。ドローイングした作品を基礎に版画の領域で表現する内容を考える。転写の説明を行う。版木に直接描く、トレーシングペーパーで写す。これらの方法を組み合わせどこを彫るか計画を立てる。

4回目 画用紙にアウトラインを転写. 着彩する.

どこを彫るのか決めて色の効果を考える。画用紙に水彩絵の具を使って版画の摺りをシミュレーションする。その体験を経て彫り出す形の表現を意識する。サンプルの版木を用い彫刻刀の使い方と彫り方全

- 般を解説.
- 5回目 版木にアウトラインを転写. 見当を刻みさらいを行う.
彫りの作業を本格的に行う. 彫り易さを求めて彫り残す部分を水彩絵の具で染めておく.
- 6回目 カタチを彫る.
試摺りの考え方を解説. 紙の湿し方を解説.
- 7回目 カタチを彫る.
摺り具のハコビを解説し竹皮を材料に制作.
- 8回目 試摺りする.
いくつかの摺り方を解説. 技法を表現に生かす方法を探る.
- 9回目 彫りを修正し摺る.
版木の良い部分を選び駄目な部分を捨てる. 必要となれば板を増やす. その点検を常に行う目的を持つ.
- 10回目 摺る.
和紙を提供する. その特徴と摺りのコツを伝える.

- 11回目 摺る.
裏打ちを指導.
- 12回目 摺る. 完成してサインを入れる.

3) 実施結果及びアンケート調査結果

参加者には、期間中の欠席もなく有意義に過ごしていただいた。テーマの取材からはじまり限られた期間の制作ではあったが、それぞれのニーズには応えることができたと思う。

最終日には、完成した作品を交換した。筆者も人数分の作品を用意し、参加者の作品を手に入れることができたのだが、2名の参加者については期間内に完成とならず作品を得られなかったことは残念であり、反省点となった。

全日程終了後、参加者を対象に、和紙に関する内容で表1.に示した質問紙法によるアンケート調査(回答率7/11, 63%)を行った。各設問に対する回答の結果は、以下の通りであった。

表1. アンケート内容および結果

設問内容	回答数(人)	
	はい	いいえ
1 日頃、和紙が用いられた製品が身近にあるか	5	2
2 日頃、和紙を使うか	4	3
3 和紙は、高価であるという印象があるか	4	3
4 和紙は、伝統工芸品だと感じるか	7	0
5 和紙の産地として興味のある地域(複数回答可)		
美濃	7	
土佐	6	
越前	6	
阿波	5	
黒谷	0	
越中	1	
西の内	0	
小川	2	
その他	0	
6 和紙が北米、欧州向けに輸出されていることを知っているか	2	5
7 和紙の製紙技術が日本独自のもので意識したことがあるか	7	0
8 紙を漉く(抄紙)体験があるか	2	5
9 今回の講座を通して和紙に興味を持ったか	6	1
10 和紙に対する意見(自由記述より一部を抜粋)		
<ul style="list-style-type: none"> ・和紙が水にもこすりつける摩擦にも強いことにびっくりしました。 ・和室のある家に住んだら、取り入れたいと思います。以前は、和紙に絵を描き、便せんや葉書などもよく使っていましたが、最近では使っていなかったので、和紙の手触りがうれしかったです。 ・和紙を使いはじめた頃は高価だと感じたこともありましたが、材料や製紙工程を知ってからは納得しました。和紙の産地の中でも特に土佐と阿波に興味があります。日本古来の和紙製法について、意識しています。大切に受け継がれることを願っています。 ・和紙の購入は一仕事というイメージです。 ・和紙を使った商品について、和室向きという意識があり、洋室向きの商品開発と、その発信が不足していないか。 		

設問1から3では、回答者の和紙製品への親しみを見ることができる。一般的には和紙が高価なものという印象がある。しかし、全ての製品がそうではなく、求め易い価格のものもある。和紙の用途によって、回答に幅が生まれることから、別の機会には質問の仕方を工夫したい。

設問4では、全ての回答で、和紙が伝統工芸品である、となった。素材としての価値以上に、工芸製品として認識している市民の意識が読み取れる。

設問5では、和紙産地への興味を質問し、当事業で使用した、土佐和紙、阿波紙に対して意識してもらえたと思える結果を得た。また、期間中に提供しなかった美濃和紙について、知名度が高く理解のあることがわかる。

設問6では、和紙が世界的に認められていることについて、広く知られていないことがわかる。

設問7では、和紙が日本独自のものという意識を確認できる。

設問8では、抄紙体験の有無について質問し、特殊な設備を必要とする経験があったことを驚くとともに、大変喜ばしく思える。

設問9と10では、木版画制作の体験を通して、和紙に対する意識が高まることを確認できる。

III. 考察

1. 生産者を対象とした取材の結果

報告事例の1において、現地の生産者及び作業従事者と交流を得ることができた。この事例では、伝統的製紙の再現を試みながら、現在の製紙技術との対比をみいだすことができた。その経験を踏まえて、和紙に関わる今後の展望を見出したい。

機械に頼らず、伝承された専門用具により、全て手作業で進められる工程は、既に多くの博物館などで公開されている。実際に行われている現代の製紙は、生産性を高めるために、必要に応じて効率化が進んでいるが、紙質に与える変化は大きく伝統の継承は課題を抱えている。また企業としての経営は厳しく、成長産業ではないことにより後継者不足に悩まされているのが現況である。和紙に工芸的価値が認め

られることから、和紙製造業にはものづくりとしての精神性が色濃く刻まれている。それを示す内容として、製紙工程の一部を解説しながら、技術者達の取り組みを紹介したい。

和紙の紙質は、その用途に応じて変化させることが可能であり、生産者はその方法を日々研究している。報告事例で取材することが出来た伝統的な製法では、収穫した枝から樹皮を剥ぎ採り、表面の黒い外皮を包丁で取り除き、その後で晒し(紫外線に当てる)を行う(未晒しの場合には原料の色合いになる)。紙質に影響を与える工程は、繊維の煮熟から叩解の工程である。煮熟は、原料となる樹木の皮を煮ることで結束した繊維をほぐす目的を持つ作業工程である。木灰あるいは消石灰などを加えて、皮を煮ることにより、結びついた繊維の癒着を緩め、製紙における不純物を取り除く。繊維を良く洗い、ちりとりを手作業で行う。叩くことで繊維を柔軟にしながら、細かく長さを整える叩解の作業を行う。ここまでが、紙を漉く事前の主な準備である。これらの工程では必要に応じて、原料の質を変える、作業を機械化して労力を減らす、薬品を使って時間を短縮するなどの効率化が行われる。その目的は、要求される製造コストに合わせるためであり、生産者は伝承される製法と効率化の狭間で常に課題を抱えているようであった。生産現場は研究施設であると同時に、企業として自立することが前提にある。その上で、上質な紙の供給を実現しているのが現状であった。

生産者の研究は、効率化を図るものだけではなく、歴史研究や技術の研鑽を含む内容があり、地域文化の伝承を大きく担うものである。常につくり手としての拘りを持ちながら、性格の異なるニーズに対応させて、その意識を届けようと努力しているように感じられた。我々消費者も、和紙を我が国の継承する文化として位置付けるならば、和紙を扱う専門家が新しい交流を生み出し、教育教材を展開させて、その波及効果の実現を目指す必要があるといえる。

2. 市民を対象とした造形教室

報告した事例はいずれも市民を対象とした催事であり、参加者の年齢も幅広いものであった。ここでは、

この事例で確認できた特徴と、その効果について整理したい。

まず、報告した造形教室は、いずれも定員を大幅に超える応募には至っていない。和紙や木版画に関連した造形体験に、多大なニーズがあるとは感じられない。そのかわりに、専門的な知識を補う研修や、専門性に触れる機会となる体験活動は、一定のニーズがあると感じられる。

土佐和紙アートプロジェクトでは、手漉き和紙職人、額縁職人、絵画修復家、造形作家、木版画愛好家、大学生、小学生というように多様な参加者が認められた。これは、開催地の位置的状况と短期滞在型の実施形態が起因するものと思われる。この事業では、開催地の施設を含む環境そのものが教材になるものであり、この要素を除いて実現しないことは明確である。また、滞在する参加者と現地に居住する参加者のグループ、生産者と消費者のグループ、美術家と市民のグループ、外国人作家と市民のグループ、以上の4通りのグループ活動が成立していた。その中で、事業の目的に沿った交流が生まれ、風土と伝承、和紙と造形を軸として双方向の取材活動が実現していたのである。このことから、短期休暇を利用しての滞在型研修事業を展望できる事例になったと考えている。

ドローイングと木版画では、会場のある横浜のみならず、周辺からの参加者を得た。彼らの意識には、専門的な領域を研修する学習機会として、新鮮な造形体験を求めた活動機会として、大まかにこれら2つのニーズが認められた。造形教室の構成は、創作を促す造形思考の組み立て方の解説と、創作領域に位置する専門性を高める技術的指導を織り交ぜた実習としている。加えて、木版画制作で支持体となる和紙に関する意識を高めるような展開を実践した。具体的には、産地の異なる複数種の和紙を提供し、各自で行う表現を通して、発色の違い、使用感の差異などを体験できる内容である。これは、表現活動を多角的に考察しながら、素材との対話を実現するための工夫である。分かり易く言い換えれば、同じ赤い絵の具を使って、求める赤に発色させるための、適した紙を追求する、ということである。このことから、

表現活動における“追求する姿勢”を体感できた事例だと考えている。

都市型の施設内における造形教室では、内面にあるイメージの世界を拡張することが難しい。表現は、感覚的に受信した情報を感覚的に発信する行為である。そのことを考えると、情報を受け入れる導きが最も重要であり、表現を試みる側にその準備を促し、取材した内容を積極的に展開させる合理性と技法内容を提供することが、指導者に求められている。それに対し、学習にとって有効なロケーションを有する滞在型の研修活動に於いては、その内容のみならず、参加者は独自に学び取る術に気付き、自発的に行動する関係者の姿を確認することができている。

3. 伝統的な和紙素材の教育的価値

和紙には、その地域性が色濃く現れる。気候によって、原料となる樹皮繊維の質に差異が認められ、それが紙質に影響するからである。製法にもそれぞれ特色があり、家内生産の時代に比較すれば、大まかとなったであろうが、特定の地域内であっても、企業によって得意とする紙質がある。産地に隣接する地域の学校においては、そうした環境での職場体験や、見学実習体験を行うことが容易に実現し、児童にとっては貴重な経験となるだろう。

和紙産業の衰退を経た復興の流れの中で、教育教材として導入が図られ、総合的な学習の時間のために設けられた授業用キットも、現在では市販されている。教育的価値は既成の教材の中にも、十分に認めることが出来る。それは、伝統工芸士の使う道具とは異なるが、実際に触れて体験することにより、意識の広がりとその後に発展するだろう気づきの基礎が得られるからだ。負の方向性で教育教材を選定するのではなく、学びの機会を広げる意図で和紙文化に関わる授業計画へと、是非とも教育現場には挑戦してもらいたいものである。この東京の都市部にも、江戸から明治期にかけては、現在の江戸橋付近の神田川流域で製紙が盛んであったことから手がかりもあるといえよう。

和紙を単なる図工の素材としてではなく、盛衰する地場産業として捉えることにより、現在の地域社会と

の対比から、自然環境や地域史などのような他教科との連携を生み出す要素を持っていると考えることができる。

4. 現行教材への応用とその課題

和紙の歴史と文化は大変奥深く、専門的な領域であるに違いない。異なる時代を生きた先人の感覚を想い描くためには、和紙の持つ特性を良く理解する必要がある。

- ①洋紙に比べ、繊維が長く強靱である
- ②液体を吸い易く、水で洗うことができる
- ③長期の保存に絶える、経年劣化が比較的少ない
- ④原料が限られており、生産性が低い

例えば、幼児が紙を使った遊びを展開する場合に、和紙は簡単にちぎることが出来ない紙となる。洋紙の場合も厚ければちぎれないが、和紙では薄くとも幼児は容易にちぎれないだろう。洋紙ではちぎれ易い撚り糸も、和紙では強靱となり、紙工作の一技法となり得る。画用紙に絵の具を垂らすと、乾くまで時間がかかるが、和紙ならば短時間で浸透し、大きく滲む。支持体としての和紙は、しみ止め処理を行うことで性質を変え、絵の具を弾く紙にすることが出来る。条件さえ整えば、和紙は千年の時を越えることが出来る。文化財の修復にも、和紙が数多く用いられていることから和紙の耐久性、保存性は証明されている。

このように、地域性や製法によってその特徴を備えることに加え、和紙と洋紙の性質の違いから、教材としての適性にも多くの可能性が秘められていることがわかる。もちろん、洋紙を否定する考えではなく、異なる性質の比較の中に気づきの機会を認めるものである。良質な和紙の市価は、とても高価な状況であり一般的な販路では勧められない。しかし、教育分野に対して、生産者から直接供給される契約が成り立つならば、希望が見出せるのではないかと展望する。課題は、生産者や和紙の専門知識を持つ人材の教育参画にあり、そうした機会の充実が、有意義な交流を生み出すものと考えている。

現在、総合的な学習の時間や、放課後子どもクラ

ブなどで、広く人材を求める風潮にある。その制度を生かした交流事業の展望が可能になってきたと考えている。我々の日常にある紙は、その原料の大半を南半球から取り寄せている。そのパルプチップが、いずれは限られた資源となることも予測でき、紙繊維の再利用にも限度がある現状から、和紙の教育への積極的導入を願うものである。

5. 総合的な体験活動の展望

教育環境を多様化させることで、現代の様式化した生活環境に刺激を補うことが出来ると考える。土佐和紙アートプロジェクトでは、自然との共生が現代よりも意識できるだろう時代をイメージし、伝統的な和紙製法を再現するプログラムの中で、各々で異なる価値意識を持った集団に連帯感が生み出されていた。この事例から都市部における体験活動へと応用する手がかりが、まだ隠れていると確信している。今後、総合的な体験学習を考えるために、造形分野での問題意識を述べておきたい。

体験活動では、事前に意欲を高める必要がある。自らの意思で参加するテーマが整っていれば易いことだが、学校等教育の現場を想定した場合には、誰にでも分かり易い感覚的な身体活動を取り入れるのが有効だといえる。造形領域でいえば、見るだろう。見ることに取り組む初動へ導くことが、意欲を高める効果の一つといて良い。本来、見ることは身体活動を伴う、見るものを探す、近づいて見る、遠く離れて見る、反対側を見るなどで、見る意識のもと歩いたり走ったりすることが出来る。指導経験を振り返ると、見る角度によって形や色が変わって見えることを、受講者に気づかせることに苦労することがある。その原因は、先に動けないことにある。要するに見る前に描き切ろうとするから、必要なアイデアに気づけない状況がそこにある。

土佐和紙アートプロジェクトの中の木版画制作ワークショップでは、参加者の年齢差は30を越えていた。どちらかというと、山間部での事業展開ではあったが、都市部での体験活動のための良きサンプルを得た思いがある。総合的な学習を考えると、教科間の関連性だけではなく、地域で人材のリサイクル

が推進される現状も、ゆっくりとした自然な時流として見えてくる。今後の状況がどうなるかは予測できないが、限られた範囲で児童を取り巻く環境を取材し、現状の把握を推し進める必要がある。

6. 和紙に触れる意味

和紙を必要とする者から見て、和紙に対する市民の認識には、和紙文化の将来を考えた時に多くの希望を見いだすことができる。和紙は貴重なもの、伝統的な工芸品という見方は、現在では常識として感じられる。これは、今日までの和紙復興と教育の実りの一つであるとともに、これからの社会人が持つ課題を示すものといえる。

その課題とは、自然との共生、歴史や風土の理解とそれらとの対話である。木版画の道具もそうであるが、その支持体となる和紙も、手間隙かけてつくられる。木版画で使用するバレンには、その当てがわりに使用済みの大福帳が用いられた。その当てがわりに包むツナは、竹皮で全体を包んだあとに捨てる部分を編んで作られている。伝統的な和紙は、地域に自生する植物を採取し、家内事業として原料を整えてきた。農耕生活を主としながら、厳寒の休耕期に製紙作業が行われてきた。それらは生活に密着しており、どこまでも無駄がない。製紙が盛んだった時代では、考えもしなかったことと思われるが、現代では意識を傾けなければ、これらに触れてその内容を感じ取ることが難しい。

学校教育に於いて、和紙産業の復興とともに教材として使用されて来たが、当該地域にその環境が整わないと、消極的にならざるを得ないだろう。身体的に魅力を感じ取り、本質を知るためには、その背景を学び、実際に触れなければならないと思う。これからの時代に向けて、地域の歴史文化にもっと踏み込んだ教材研究が必要であると思われる。そうした状況に対し、刺激となるような体験学習を提供できるならば、その機会を多いに生かしたい。

IV. 今後の課題

製紙が地場産業であり、自然との共生の中で厳し

い労働のもと営まれていたことを考えると、地域社会における伝承という教育力を持った文化の中に継承されてきたといえる。この和紙を教育教材として発展させるアイデアは、世代間の交流を育む教材として捉えることも意味している。現在の、個人や家族が孤立する傾向にある都市生活の中、こうした問題に立ち向かおうとする取り組みが必要とされている。学習機会の提供を考えた場合、その期日や場所、対象とするグループを、指導法や指導内容とともに見極める必要を感じている。

課題は、多岐にわたる内容となり、学校や行政、地域の自治会との連携に始まり、福祉施設との関係をも模索しなければならないだろう。また、地域社会を対象にするとすると、継続的な事業展開を行わなければ、目的を達することは困難である。また、活動内容が造形領域だけでは、ニーズに対応する要素が不足し、柔軟な展開を遂げることはできないと考える。専門家、知識者、技能者を地域社会にコーディネートして拡張性を高める必要もあると云える。そのために、地域を良く学ぶ必要がある、そこに見られる諸問題にスポットを照らし、それを基点とした現状の調査、考察に基づき、伝承的な歴史文化を反映させた事業の実現を目指したい。

対象として児童を主軸とするならば、小学校の放課後時間の取り組み、児童館などの子育て支援、自治的市民活動などと連携を図り、地域施設を利用した催事の利用状況や、福祉施設との交流状況、担当者と奉仕者の関わり方、市民生活の動向などを整理し、改めて地域社会の抱える問題意識を確かめたい。

筆者の所在を考えれば、東京都の国立、立川地区がその対象として望ましい。調査と取材から得る地域社会のニーズに対応することで、新しい世代間交流を誘発させる場づくりを、市民と共に目指そうとしている。

謝辞

この場を借りて、本報告にある事業に関わった全ての方々に、心より感謝申し上げます。

参照文献

- 1) 武蔵野美術大学油絵学科版画研究室編,「版画」,武蔵野美術大学出版局,2002年
- 2) 大坪圭輔+村上暁郎編,「美術教育研究」,武蔵野美術大学出版局,2002年
- 3) 高橋陽一監修,杉山貴洋編集,「ワークショップ実践研究」,武蔵野美術大学出版局,2002年
- 4) 渡邊洋,「共同研究五箇山和紙」,大学版画学会会報no.30,2002年